

IX章 K 39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点から出土した竪穴住居址の検討

高倉 純

IX-1 はじめに

2001～2002年に発掘調査が実施された北海道大学構内のK 39遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点では、3つの層準から縄繩文初頭～前葉に属する計12基の竪穴住居址が検出された。当該期に帰属する竪穴住居址の一遺跡（地点）における出土数としては、相対的に多いといってよい。

本章では、出土竪穴住居址の形態、埋没過程について調査結果の整理をおこなう。また、石狩低地帯における縄文晩期～縄繩文の竪穴住居址の集成をおこない、その形態や埋没過程に関して若干の検討を実施していくことにしたい。ただし、遺跡の形成過程という観点からみた竪穴住居址内・外での空間利用にかかわる問題点については、動植物遺存体の分析結果をふまえ、あらためて議論をおこなう機会をもちたい。そのため、ここでの検討対象からは除外することとした。

IX-2 縄繩文の竪穴住居址研究

これまでたびたび指摘されてきたように、北海道の縄繩文遺跡からは、遺構として土坑（墓）が検出されることがきわめて多く、その一方で竪穴住居址の出土数が多いとはいがたい。そのため、当該期の竪穴住居址に関して、個別的な事実記載にとどまらず、地域や時期を通じた変異傾向の把握、ならびにその意味づけをおこなっていく議論が、これまで充分になされてきたというわけではない。

縄繩文における竪穴住居址についてまとめた発言をはじめておこなったのは、藤本強（1977）である。藤本は、オホーツク海沿岸常呂町内の調査事例にもとづき、同一地域内で時期に応じて竪穴住居址の形態に変化がみられることを指摘した。

北海道全域における縄繩文の竪穴住居址に関しては、その後、乾 芳宏（1979）や宇田川洋（1982）によって総括的な検討が実施されている。そこでは、地域・時期ごとの平面形、住居址内における炉址の位置・形態、集

落の立地、集落内での時期ごとの竪穴住居址の位置変遷に関して、傾向の把握がなされている。乾や宇田川らによる整理に対しては、現段階でも大きな修正を加える必要性はない。しかし、その後の調査の進展により、とりわけ北海道東部のオホーツク海沿岸（武田編 1996、2000、熊木 2003）や北海道中央の石狩低地帯においては、新資料の蓄積が著しい。そのため、かつての整理の段階では不分明であった時期・地域の傾向が、より明瞭に把握することが可能となっている。

縄繩文の住居址に関しては、近年、縄繩文中葉における“遊動性”に富んだ生活形態への転換を読みとろうとする石井淳（1998、2005）によって、新たな論点が提起されている。それは、すなわち、住居址の形態に、「明確な掘り込みを有する」ものと「明確な掘り込みの認められない浅い皿状」のものがあることを指摘し、両者は石狩低地帯では縄繩文初頭から認められることを述べた（石井 2005：163）。住居址の有無や形態の時期的な変化を、“遊動性”といった集団の行動パターンの変化に関連づけさせて解釈していくこうとする方向性は、注目すべきものといえよう。

以上のような研究の経過と現状をふまえ、当面必要とされている検討課題について簡単に述べておく。第一に、宇田川らの論考以降に蓄積された資料を含め、あらためて竪穴住居址の形態に関する傾向の整理をおこなっておく必要があろう。それにより、どのような点を問題として、意味づけにかかわる議論を深めていかねばならないのか、が明らかとなるにちがいない。第二に、従来の議論では、平面形や炉址の有無・形態に注目が集められてきたが、新たな意味づけを模索していくためには、これまで俎上にあげられてはこなかった属性に対しても検討を及ぼしていく必要があろう。掘り込みの深さのような断面形、あるいは埋没過程にかかわる問題などが、それにあげられる。第三に、住居址の形態に関して反証可能な意味づけを試みていくためには、形成過程の吟味をおこなっていくことが必要となる。そこでは、覆土の堆積学的・土壤学的検討、ならびに床面上や覆土中から検出された遺物（自然遺物を含む）・遺構の多角的な検討が大きな意味をもつにちがいない。

IX-3 本地点出土の竪穴住居址

本地点からは、基本層序 14 a 層・13 b 層・12 c 層から掘り込まれたと考えられる竪穴住居址が計 12 基検出されている。その形態と埋没過程に関して、それぞれ概観していくことにしよう（図 1 参照）。

14 a 層下面が掘り込み面と考えられる竪穴住居址（HP 4～6）は、平面形がいずれも円形であった。中央からは炉址が検出されている。炉址には石囲いのもの（HP 6）と、石囲いではないもの（HP 4～5）がある。炭化物集中箇所や土坑などは検出されていない。いずれも掘り込みが浅く、立ち上がりも明瞭ではない。HP 6 は、西側にわずかに残存していた立ち上がりが確認できたため住居址と認定したが、その時点では住居址の東側の立ち上がりは調査の進行により失われてしまっていた。HP 4・5 では、床面から掘り込まれている深さ約 15～20 cm の小ピットが、壁際から約 30～50 cm の位置にそれぞれ 5 基確認されている。

住居址の埋没過程で特筆すべき点は、HP 4 の北壁際の覆土中から炉址が 1 基検出されたことである。埋没途上の窪地を利用した活動の痕跡を示している。覆土中から検出された遺物も、そうした活動と何らかの関連性があるのであろう。

13 b 層中が掘り込み面と想定される 2 基の竪穴住居址（HP 10・12）のうち、完掘された HP 10 は、北東方向に舌状の張り出し部を有するもので、平面形はスペード形を呈していた。床面では、中央に炉址が確認されたほか、住居址本体から張り出し部にかけて炭化物集中箇所が検出されている。深さ 20～30 cm の小ピットが壁際から約 50 cm の位置に分布していた。HP 12 では、炉址の周囲をめぐる礫が抜き取られていた痕跡が確認された。炉址の周囲に礫が検出されなかった場合でも、石囲いの炉址であったことが推定できる一例となっている。

HP 10・12 が残された場所には、12 c 層の段階になって HP 1・11 が構築されている。張り出し部や炉址の位置なども、前段階の住居址のそれを踏襲しているのが注目される。HP 10・12 の覆土の観察からは、HP 10 や HP 12 の埋没の始まりと HP 1 や HP 11 の構築との間には、一定の時間的な間隔があったと考えられる。そのため、この事例は、いわゆる住居の拡張とはいがたい。しかし、住居址相互の構築の間には何からの強い関連性があったことが想定される。

12 c 層下面が掘り込み面と考えられる 7 基の竪穴住居址（HP 1～3・7～9・11）は、全体形が把握されてい

ない HP 11 を除き、いずれも舌状の張り出し部を有するものであった。張り出し部は、長さが 2 m 以上あるもの（HP 7）から、50 cm 程度のもの（HP 8・9）まで、サイズにはバリエーションが認められる。炉址や炭化物集中箇所、小ピットなどの遺構、掘り上げ土が住居内・周囲から全く検出されなかった HP 8 を除き、その他の住居址では各種の遺構、掘り上げ土が確認されている。ほとんどの住居址では、中央部分から炉址が検出されている。炉址のなかには石囲いのものもある（HP 1・7・9・11）。HP 1 や HP 11 では、礫が抜き取られていた痕跡が把握できた。他遺跡の事例も加味すると、いずれの住居址の炉址も本来的には石囲いのものであった可能性が想定される。住居址内からは炭化物集中箇所が検出されている場合が多く、とくに住居址本体から張り出し部にかけての区域に分布する傾向が認められる（HP 1・7）。ここから回収された微細遺物の分析を待って、この区域での活動～放棄過程にかかる問題について議論を試みてみたい。多くの住居址の周囲には掘り上げ土が幅約 2 m ほど認められた（HP 1・2・7・9・11）。掘り上げ土が確認されたいずれの場合でも、張り出し部の先端付近までに掘り上げ土は及んでいない。小ピットに関しては、住居址内から多数確認されている場合（HP 1・2・3・9・11）と、僅かもしくは全く確認されていない場合（HP 7・8）がある。後者のような事例が認められる理由として、本来的に小ピットが無かったのか、もしくは検出過程の問題に起因するのか、を今後検討していかねばならないであろう。小ピットの数は HP 1 で最も多く、31 基が検出されている。数や分布からみて、上屋が何度も建て替えられた結果を示している可能性が高い。

埋没過程で注目すべき点は、炉址や土坑などの遺構が、床面だけでなく覆土中にも形成されていることである。HP 7・9 では覆土中から炉址が検出されたが、それらは床面の炉址とほぼ同じ空間的位置にある。これらの覆土中における遺構の存在は、先の 14 a 層の HP 4 と同様に、埋没途上の窪みが何らかの活動場所として利用されていたことを示している。明確な立ち上がり・プラン等が把握できなかったため、住居址としての認定にはいたらなかったが、本地点報告第 I 分冊（p.64）で指摘したように、包含物・層のあり方からみて、HP 7 の覆土中には再度竪穴住居が構築されていた可能性が想定できる。この想定が妥当ならば、先に述べた HP 10 と HP 1、HP 12 と HP 11 と同じような関係を、この事例も示していることになろう。

覆土中での焼土の広がり・炭化材の出土状況からみて、焼失住居址と考えられるのは HP 1・3・7・11 である。

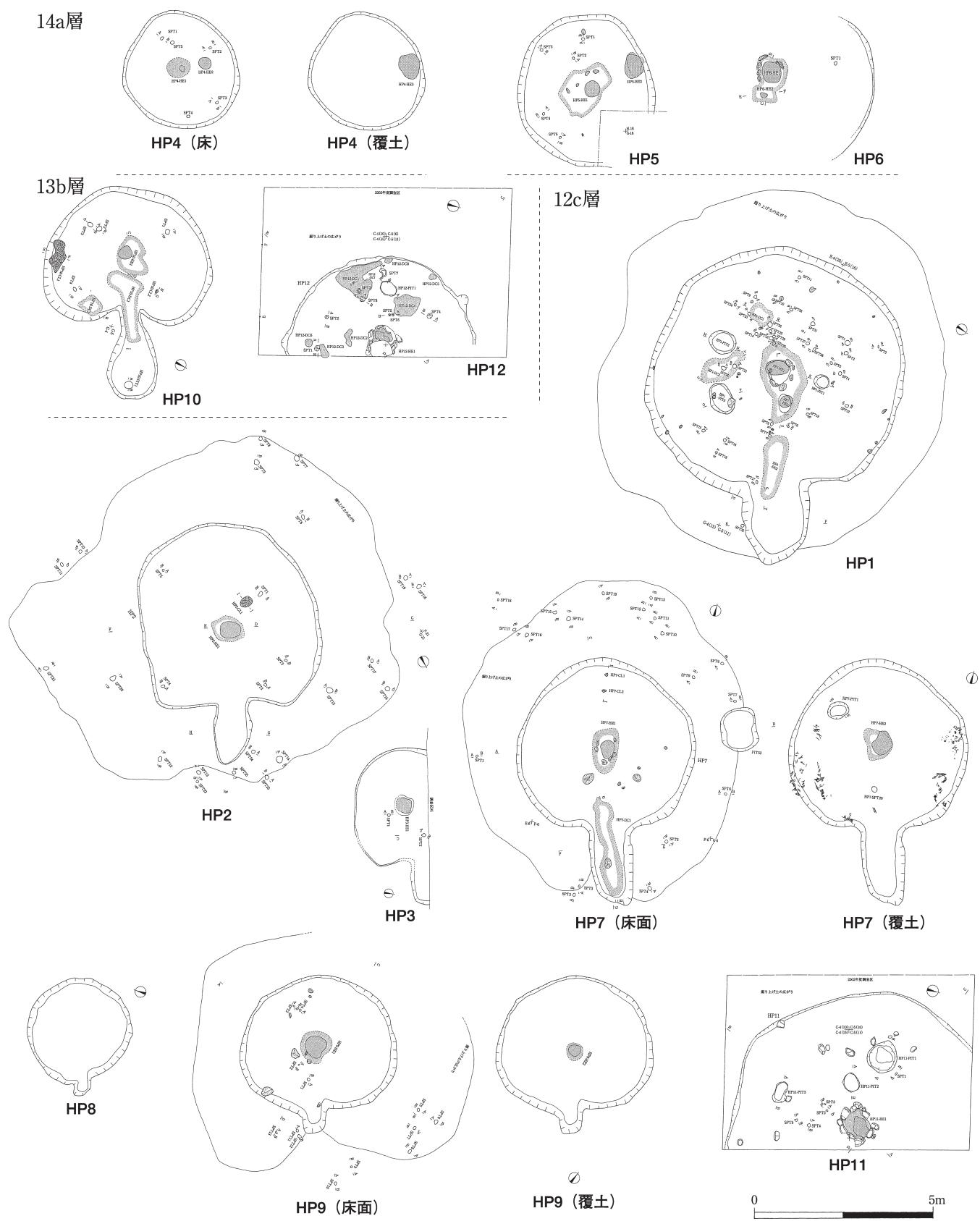


図 I K 39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点出土の竪穴住居址

炭化材の遺在状態がとくに良好だったのは HP1 と HP 11 であった。両住居址から検出された炭化材の樹種同定の結果は、本書IV章に示した。HP 1 では、床面から検出された炉址 HE 1において、石囲いの礫が抜き取られ放棄された後、若干の時間的間隔があったのち、残されていた上屋が焼失したことが把握されている。HP 11 も同様の過程を経たと考えられる。

IX- 4 石狩低地帯における縄文晚期～続縄文の竪穴住居址

石狩低地帯に分布する縄文晚期から続縄文にかけての竪穴住居址を集めた(表1)。記載項目について以下に述べていく。

「平面形」は、張り出し部を除いた住居址本体の平面形態を指す。I：円形、II：楕円形、III：隅丸不整方形、IV：その他（扇形・有肩不整円形など）に分けた。「主軸長」では、舌状の張り出し部を有するものに関しては、張り出し部までを含めた長さとした。張り出し部をもたないものに関しては、最大長を示した。「短軸長」とは主軸長に直交する軸の長さを示す。両者ともに上場の数値を示す。「深さ」とは、掘り込み面が把握されている場合、掘り込み面から床面までの長さを示している。掘り込み面が削平されている場合、数値に括弧を付した。数値は 0.05 m 単位で表示した。「張り出し部の長さ」とは、張り出し部の端部から住居址本体に連結する部分までの上場の長さを示している。「炉址（床面）の石囲い」では、床面から検出された石囲いのある炉址、無い炉址、それぞれの数を示している。石が抜き取られた痕跡が確認できた例は、石囲いに含めている。「小ピット」は、柱穴などとして報告された遺構の数を示している。「掘り上げ土」は住居址周囲でのその有無を示している。「焼失住居址」は、当該住居址が焼失住居址であるのか否かを示している。焼失住居址の認定条件については、大島直行(1994)の議論がある。ここでは、それぞれの遺跡報告書で、焼失住居址として報告されている以外に、覆土中に焼土や大形の炭化材の広がりが広範囲に認められたと記載されているものに関しては、人為的な投棄や自然流入、あるいは覆土中に炉が形成された痕跡を示していると考えたい場合、焼失住居址であった可能性が高いものとみなしてカウントした。「覆土中の遺構」では、覆土から検出された遺構の種別を記号で表示した。「帰属時期」の区分は以下のように表示した。I：縄文晚期前葉、II：縄文晚期中葉、III：縄文晚期後葉～末、IV：続縄文初頭（大

狩部期併行）、V：続縄文前葉（恵山期併行～後北A・B期）、VI：続縄文中葉（後北C₁期とそれ以降）。住居址の帰属時期の判定は、主に床面から出土した土器の型式に依拠したが、それが困難であった場合には、覆土や周囲の包含層からの出土遺物も勘案した。段階設定を細かくおこなうと、各住居址の時期判定が困難になる恐れがあつたため、ここでは大まかな区分にとどめた。

以下、この集成をもとに石狩低地帯における当該期の竪穴住居址の検討を進めていく。なお、以下の説明で用いる遺構名は、各報告書で使用されているものを踏襲した。

平面形：縄文晚期では、円形や楕円形の例が圧倒的に多い。また、現在までのところ、張り出し部を有するものは、千歳市キウス 5 遺跡 BH-1 (図 2-4) を除いて検出されていない。このキウス 5 の例は、張り出し部が緩やかに広がりつつ住居址本体に接続しており、住居址本体と張り出し部が形態上明瞭に区分されているというわけではない。この点で、続縄文で一般的に確認されている張り出し部を有する住居址とは、形態が明らかに異なっている。このような形態の評価は、今後の類例の増加を待つたうえでおこないたい。続縄文初頭（IV期）になって張り出し部を有する住居址が本格的に登場する（図 2-5・8・9）。張り出し部を伴うもの、伴わないものの両者は、この時期以降、一つの遺跡内からともに確認されている（札幌市 N 295 遺跡、江別市旧豊平河畔遺跡、苫小牧市静川 22 遺跡等）。続縄文になると楕円形の平面形を示すものは減り、一方で不整方形などの形態が増している。

サイズ：縄文晚期の事例は、主軸長が 2～3 m の小形、4～6 m 前後の中形、7～8 m 前後の大形、に大きく分けられる。小・中形が圧倒的に多く（図 2-1～3）、大形に属する例は、石狩市志美第 1 遺跡、千歳市梅川 3 遺跡でわずかに確認されているにすぎない。続縄文初頭（IV期）になると、張り出し部を除いた住居址本体部分のサイズだけをみても、中～大形に属する事例が増えているとともに、続縄文前葉（V期）では、旧豊平河畔遺跡の事例（図 2-9）のように 8 m をこす超大形の例も現れている。大形・超大形に属するものは、静川 22 の 2 号住居址（図 2-7）を除き、いずれも張り出し部を有している。張り出し部を伴わないものは、小～中形のサイズにまとまる傾向が認められる（図 2-6・10）。以上から、続縄文にいたって張り出し部を有するものを中心にサイズの大形化の傾向が認められること、ならびに張り出し部を伴わない小～中形サイズの住居址も一貫して構築されていることがわかる。続縄文中葉（VI期）になると、再びサイズは小形化している（図 2-11）。

表1 石狩低地帯における縄文晩期～続縄文の竪穴住居址(1)

所在地	遺跡名	地点名	遺構名	平面形	主軸長(m)	短軸長(m)	深さ(m)	張り出し部の長さ(m)	炉址(床面)の石窓い		小ピット	掘り上げ土	焼失住居址	覆土中の遺構	帰属時期	文献
									有	無						
札幌市	T 466	—	第1号竪穴住居跡	II	2.8	2.2	(0.55)	×	×	1	1	×	×	×	III	加藤他 1984
札幌市	T 151	南側	第2号竪穴住居跡	—	5.9	(4.9)	(0.10)	—	1	×	25	×	×	×	III	羽賀編 1989
札幌市	N 30	平成7・8年度発掘調査地区	HP 2	I	5.8	5.5	0.40	×	—	6	131	○	○	×	III	上野編 1998
札幌市	N 30	平成7・8年度発掘調査地区	HP 3	I	5.2	(5.2)	0.30	×	1	—	100	○	○	HE	III	上野編 1998
札幌市	N 30	平成14年度発掘調査地区	HP 1	IV	6.8	4.0	0.30	2.6	—	1	×	×	×	HE	IV	羽賀編 2004
札幌市	N 30	平成14年度発掘調査地区	HP 4	III	6.8	4.4	0.20	2.1	—	1	5	×	○?	×	IV	羽賀編 2004
札幌市	N 30	平成14年度発掘調査地区	HP 5	III	5.7	4.0	0.30	1.7	1	—	×	×	×	×	IV	羽賀編 2004
札幌市	N 30	平成14年度発掘調査地区	HP 6	I	6.8	4.6	0.35	1.8	1?	2	86	○	×	DB	IV	羽賀編 2004
札幌市	N 30	平成14年度発掘調査地区	HP 11	—	6.4	(3)	0.25	—	×	×	×	×	×	×	V	羽賀編 2004
札幌市	N 30	平成14年度発掘調査地区	HP 12	I	7.2	6.6	(0.10)	—	—	1	19	×	×	×	V	羽賀編 2004
札幌市	N 30	平成14年度発掘調査地区	HP 13	I	6.6	5.2	(0.10)	○	1	×	53	○	×	×	V	羽賀編 2004
札幌市	H 37	栄町	HP 1	—	(4.2)	(4.0)	(0.15)	(2.5)	1?	1	×	×	×	×	IV	秋山編 1998
札幌市	H 37	丘珠空港内	HP 1	III	8.5	5.4	(0.20)	2.5	1	×	17	×	○	×	IV	羽賀編 1996
札幌市	K 39	人文・社会科学総合教育研究棟	HP 4	I	3.3	3.1	0.10	×	×	2	5	×	×	HE	IV	小杉他編 2004
札幌市	K 39	人文・社会科学総合教育研究棟	HP 5	I	4.3	3.8	0.10	×	×	2	5	×	×	×	IV	小杉他編 2004
札幌市	K 39	人文・社会科学総合教育研究棟	HP 6	—	—	—	0.10	—	1	1	1	×	×	×	IV	小杉他編 2004
札幌市	K 39	人文・社会科学総合教育研究棟	HP 10	IV	5.9	4.7	0.20	2.6	×	1	4	×	×	×	V	小杉他編 2004
札幌市	K 39	人文・社会科学総合教育研究棟	HP 12	—	—	—	0.10	—	1	×	8	○	×	×	V	小杉他編 2004
札幌市	K 39	人文・社会科学総合教育研究棟	HP1	I	8.8	7.2	0.20	2.1	1	1	31	○	○	×	V	小杉他編 2004
札幌市	K 39	人文・社会科学総合教育研究棟	HP 2	IV	6.7	5.0	0.15	1.6	×	1	5	○	×	×	V	小杉他編 2004
札幌市	K 39	人文・社会科学総合教育研究棟	HP 3	IV	4.4	—	0.20	1.2	×	1	×	×	○	×	V	小杉他編 2004
札幌市	K 39	人文・社会科学総合教育研究棟	HP 7	I	6.8	5.1	0.25	2.2	1	×	×	○	○	HE・PIT・SPT	V	小杉他編 2004
札幌市	K 39	人文・社会科学総合教育研究棟	HP 8	I	3.3	2.9	0.30	0.4	×	×	×	×	×	×	V	小杉他編 2004
札幌市	K 39	人文・社会科学総合教育研究棟	HP 9	I	4.4	4.3	0.30	0.5	×	1	4	○	×	HE	V	小杉他編 2004
札幌市	K 39	人文・社会科学総合教育研究棟	HP 11	—	—	—	0.10	—	1	×	5	○	○	×	V	小杉他編 2004
札幌市	N 295	—	第2号竪穴住居跡	II	7.3	5.7	(0.20)	—	1	×	11	×	×	×	V	羽賀編 1987
札幌市	N 295	—	第3号竪穴住居跡	I	5.1	5.0	0.35	—	1	×	16	×	×	×	V	羽賀編 1987
札幌市	N 295	—	第4号竪穴住居跡	—	—	—	0.25	—	—	—	11	—	—	—	V	羽賀編 1987
札幌市	N 295	—	第5号竪穴住居跡	I	6.3	4.6	0.25	1.5	—	2	36	—	—	—	V	羽賀編 1987
石狩市	志美第1遺跡	—	第1号竪穴住居址	I	5.5	4.9	(0.40)	—	—	1	—	—	—	—	III	石橋編 1979
石狩市	志美第1遺跡	—	第2号竪穴住居址	I	7.9	7.0	(0.45)	—	—	—	—	—	—	—	III	石橋編 1979
石狩市	志美第1遺跡	—	第3号竪穴住居址	I	6.7	6.2	(0.50)	—	—	2	—	—	—	—	III	石橋編 1979
石狩市	紅葉山33号	—	HP-1	—	—	—	—	—	—	—	?	—	—	—	?	石橋・清水 1984
石狩市	紅葉山33号	—	HP-2	—	—	—	—	—	—	—	?	—	—	—	?	石橋・清水 1984
江別市	旧豊平河畔	—	1号住居跡	I	12.6	8.4	0.45	4.1	—	4	○	×	—	○?	V	高橋編 1981
江別市	旧豊平河畔	—	2号住居跡	I	14.4	7.8	0.35	6.2	—	4?	○	—	—	—	V	高橋編 1981
江別市	旧豊平河畔	—	3号住居跡	I	—	—	—	3.3	—	?	○	—	—	—	V	高橋編 1981
江別市	旧豊平河畔	—	5号住居跡	I	3.0	3.0	(0.30)	—	—	—	7	—	○?	—	V	高橋他 1983
江別市	旧豊平河畔	—	6号住居跡	I	5.0	4.0	(0.40)	0.7	—	8	—	—	○?	—	V	高橋他 1983
江別市	旧豊平河畔	—	7号住居跡	I	9.7	6.9	(0.40)	3.5	—	1	○	—	○?	—	V	高橋他 1983
江別市	旧豊平河畔	—	8号住居跡	I	4.0	3.8	(0.50)	—	—	—	5	—	○?	—	V	國部編 1984
江別市	旧豊平河畔	—	9号住居跡	I	4.1	3.8	(0.50)	—	—	—	○	—	○?	—	V	國部編 1984
江別市	旧豊平河畔	—	10号住居跡	I	4.5	4.0	(0.50)	—	—	—	3	—	○?	—	V	國部編 1984
江別市	旧豊平河畔	—	11号住居跡	I	2.9	2.5	(0.50)	—	—	1	5	—	—	—	V	國部編 1984
江別市	旧豊平河畔	—	12号住居跡	III	2.8	2.3	(0.30)	—	—	—	—	—	○?	—	V	國部編 1984
江別市	旧豊平河畔	—	13号住居跡	I	4.1	3.9	(0.80)	—	—	—	6	—	○?	—	V	國部編 1984
江別市	旧豊平河畔	—	14号住居跡	I	3.0	2.9	(0.30)	—	—	1	3	—	—	○?	V	國部編 1984
江別市	旧豊平河畔	—	15号住居跡	II	2.3	1.9	(0.20)	—	—	—	—	—	○?	—	V	國部編 1984
江別市	旧豊平河畔	—	17号住居跡	I	4.1	3.9	(0.40)	—	—	—	—	—	○?	—	V	國部編 1984
江別市	旧豊平河畔	—	18号住居跡	I	4.0	3.7	(0.50)	—	—	—	2	—	○?	—	V	國部編 1984
江別市	旧豊平河畔	—	20号住居跡	I	14.5	9.6	(0.50)	7.0/4.8	—	—	○	—	—	○?	V	國部編 1984
江別市	旧豊平河畔	—	21号住居	I	3.2	3.2	(0.60)	—	—	—	—	—	—	—	V	高橋編 1985
江別市	旧豊平河畔	—	22号住居	I	4.0	3.9	(0.40)	—	—	—	—	—	—	—	V	高橋編 1985
江別市	旧豊平河畔	—	23号住居	I	3.4	3	(0.70)	—	—	—	—	—	○?	—	V	高橋編 1985
江別市	旧豊平河畔	—	24号住居	I	3.7	3.4	(0.50)	—	—	—	—	—	—	—	V	高橋編 1985
江別市	旧豊平河畔	—	25号住居	IV	8.5	5	(0.20)	3.0	—	1	○	—	○?	—	V	高橋編 1985
江別市	旧豊平河畔	—	26号住居	I	3.8	3.5	(0.50)	0.3	—	—	—	—	○?	—	V	高橋編 1985
江別市	旧豊平河畔	—	27号住居	I	4.0	3.6	(0.40)	4.0	—	—	—	—	○?	—	V	高橋編 1985
江別市	旧豊平河畔	—	28号住居	III	10.8	6	(0.40)	4.0/3.6	—	1	○	—	—	○?	V	高橋編 1985
江別市	旧豊平河畔	—	32号住居	IV	8.3	—	(0.40)	3.5	—	1	○	—	—	○?	V	高橋編 1985
江別市	旧豊平河畔	—	34号住居	IV	10.4	6.4	(0.40)	5.0	—	—	—	—	—	—	V	高橋編 1985
江別市	旧豊平河畔	—	35号住居	I	13.0	7.7	(0.20)	4.8	—	1	○	—	—	○?	V	高橋編 1985
江別市	旧豊平河畔	—	36号住居	II	9.9	6.5	(0.30)	4.4	—	2	○	—	○?	—	V	高橋編 1985
江別市	旧豊平河畔	—	37号住居	I	9.0	6.9	(0.20)	2.6	—	2	○	—	○?	—	V	高橋編 1985
江別市	旧豊平河畔	—	29号住居	IV	5.4	4.2	(0.25)	1.5	—	1	○	—	○?	—	V	高橋編 1986
江別市	旧豊平河畔	—	30号住居	I	3.4	3.1	(0.50)	0.3	—	—	○	—	○?	—	V	高橋編 1986
江別市	旧豊平河畔	—	31号住居	II	11.0	7.5	(0.20)	3.2	—	1	○	—	—	—	V	高橋編 1986
江別市	旧豊平河畔	—	33号住居	I	3.7	3.7	(0.35)	—	—	—	—	—	—	—	V	高橋編 1986
江別市	旧豊平河畔	—	39号住居	III	7.2	4.4	(0.30)	3.7	—	—	—	—	—	○?	V	高橋編 1986
江別市	旧豊平河畔	—	41号住居	IV	11.8	7.2	(0.40)	4.6	—	1	○	—	—	—	V	高橋編 1986
江別市	大麻22	—	H-1	I	2.1	1.8	(0.10)	—	—	—	—	—	—	—	VI	野中編 1994
江別市	大麻22	—	H-2	II	(3.6)	3.3	(0.10)	?	—	—	12	—	—	—	VI	野中編 1994
千歳市	美々3	—	H-45	II	9.2	5.9	(0.25)	—	—	1	9	—	—	—	II	大沼編 1991
千歳市	美々3	—	H-47	III	2.8	2.5	(0.40)	—	—	—	8	—	—	—	II	千葉・西田編 1992
千歳市	美々3	—	H-50	—	—	—	—	—	—	1	5	—	—	—	II	千葉・西田編 1992

○：有、×：無、—：不明、遺構名：報告書の記載に準じた

表1 石狩低地帯における縄文晩期～続縄文の竪穴住居址(2)

所在地	遺跡名	地点名	遺構名	平面形	主軸長(m)	短軸長(m)	深さ(m)	張り出し部の長さ(m)	炉戸(床面)の石廻い		小ピット	掘り上げ土	焼失住居址	覆土中の遺構	帰属時期	文献
									有	無						
千歳市	美々2	—	H-1	I	6.2	—	(0.50)	×	×	×	69	×	×	×	III	畠他 1986
千歳市	美々2	—	H-2	II	5.2	4.1	(0.80)	×	×	3	×	×	×	×	III	畠他 1986
千歳市	美々2	—	H-3	II	(6.3)	5.6	(0.20)	×	×	12	×	×	×	III	畠他 1986	
千歳市	美々2	—	H-4	II	—	—	—	×	×	5	×	×	×	III	畠他 1986	
千歳市	美々2	—	H-5	III	—	—	—	×	×	23?	×	×	×	III	畠他 1986	
千歳市	美々2	—	H-6	I	—	—	—	×	×	4?	×	×	×	III	畠他 1986	
千歳市	美々2	—	H-7	II	—	—	(0.30)	×	×	16	×	×	×	III	畠他 1986	
千歳市	美々2	—	H-8	II	—	—	(0.50)	×	×	27	×	×	×	III	畠他 1986	
千歳市	美々2	—	H-9	II	—	—	(0.50)	×	×	25	×	×	×	III	畠他 1986	
千歳市	美々2	—	H-10	II	—	—	—	×	×	12?	×	×	×	III	畠他 1986	
千歳市	美々2	—	H-12	II	—	—	—	×	×	12?	×	×	×	III	畠他 1986	
千歳市	美々2	—	H-13	II	—	—	(0.30)	×	×	1?	×	×	×	III	畠他 1986	
千歳市	美々2	—	H-16	II	—	—	—	×	×	7?	×	×	×	III	畠他 1986	
千歳市	美々2	—	H-17	III	6.0	—	—	×	×	7	×	×	×	III	畠他 1986	
千歳市	美々2	—	H-18	II	6.3	5.1	—	×	×	37	×	×	×	III	畠他 1986	
千歳市	美々2	—	H-22	II	5.2	3.7	—	×	×	5	×	×	×	III	畠他 1986	
千歳市	美々2	—	H-23	II	—	—	—	×	×	—	—	—	—	III	畠他 1986	
千歳市	美々2	—	H-24	III	6.0	(5.8)	(0.70)	×	×	1	33	×	×	III	畠他 1986	
千歳市	美々2	—	H-25	II	3.6	3.1	—	×	×	7	—	—	—	III	畠他 1986	
千歳市	美々2	—	H-26	II	—	—	—	×	×	2?	—	—	—	III	畠他 1986	
千歳市	美々2	—	H-27	II	5.5	4.2	—	×	×	25	○	—	—	III	畠他 1986	
千歳市	美々2	—	H-28	I	6.3	6.1	—	×	—	1	41	—	—	III	畠他 1986	
千歳市	美々2	—	H-29	IV	6.3	5.0	—	—	—	12	—	—	—	III	畠他 1986	
千歳市	美々2	—	H-30	III	—	—	—	—	—	7?	—	—	—	III	畠他 1986	
千歳市	美々2	—	H-31	I	—	—	—	—	—	—	—	—	—	III	畠他 1986	
千歳市	美々2	—	H-32	I	4.1	3.2	(0.40)	—	—	—	—	—	—	III	畠他 1986	
千歳市	美々2	—	H-33	I	—	—	—	—	—	9	—	—	—	III	畠他 1986	
千歳市	美々2	—	H-34	—	—	—	—	—	—	1	10	—	—	III	畠他 1986	
千歳市	美々2	—	H-36	II	—	—	—	—	—	1	16	—	—	III	畠他 1986	
千歳市	美々2	—	H-37	—	—	—	—	—	—	—	11	—	—	III	畠他 1986	
千歳市	美々2	—	H-38	—	—	—	—	—	—	—	19	—	—	—	III	畠他 1986
千歳市	美々2	—	H-39	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	III	畠他 1986	
千歳市	梅川3	—	IH-3	II	3.5	3.0	0.30	—	—	2	13	—	—	—	III	大谷・田村編 1986
千歳市	梅川3	—	IH-4	II	4.6	3.2	(0.15)	—	—	2	9	—	—	—	III	大谷・田村編 1986
千歳市	梅川3	—	IH-5	II	4.2	2.8	(0.20)	—	—	2	8	—	—	—	III	大谷・田村編 1986
千歳市	梅川3	—	IH-6	II	4.9	2.8	(0.15)	—	—	1	15	—	—	—	III	大谷・田村編 1986
千歳市	梅川3	—	IH-7	IV	2.2	2.2	(0.30)	—	—	1	—	—	—	—	III	大谷・田村編 1986
千歳市	梅川3	—	IH-8	IV	7.5	4.2	(0.20)	—	—	—	?	—	—	?	III	大谷・田村編 1986
千歳市	ママチ	—	H-2	I	2.8	2.8	(0.50)	—	—	—	4	—	—	—	III	種市編 1983
千歳市	ママチ	—	AH-3	II	2.5	2.4	(0.10)	—	—	1	4	—	—	—	III	長沼編 1987
千歳市	キウス5	—	LH-001	II	6.6	4.2	0.40	—	—	1?	—	—	—	—	III	皆川編 1997
千歳市	キウス5	—	LH-002	IV	6.5	5.0	0.15	—	—	3	—	—	—	—	III	皆川編 1997
千歳市	キウス5	—	UH-101	III	5.3	3.8	0.20	—	—	1	3	—	—	—	III	皆川編 1997
千歳市	ウサクマイ	B地区	BH-1	II	6.8	5.4	0.55	○	—	1?	—	—	—	V	千歳市教委編 1979	
千歳市	ウサクマイ	B地区	BH-2	I	—	—	—	—	—	1?	—	—	—	V	千歳市教委編 1979	
千歳市	ウサクマイ	B地区	BH-3	I	3.3	2.9	0.30	—	—	—	—	—	—	V	千歳市教委編 1979	
千歳市	ママチ高台	—	第1住居址	III	4.7	3.2	(0.50)	—	—	—	1	—	○	—	VI	石川1979
千歳市	ママチ高台	—	第2住居址	III	4.5	3.9	(0.50)	—	—	—	1	—	○	—	VI	石川1979
千歳市	ママチ高台	—	第3住居址	III	4.5	(3.2)	(0.50)	—	—	—	1	—	○	—	VI	石川1979
苦小牧市	柏原5	C・D地区	1号住居跡	—	—	3.4	0.10	—	—	—	4	—	—	—	I	佐藤・宮夫編 1998
苦小牧市	静川22	—	1号住居跡	II	5.8	4.4	0.35	—	—	1	12	—	—	—	IV	工藤・兵藤2002
苦小牧市	静川22	—	2号住居跡	III	8.2	7.4	0.75	—	—	3	5	—	—	—	V	工藤・兵藤2002
苦小牧市	静川22	—	3号住居跡	III	5.6	4.7	0.60	3.4	—	1	8	—	—	HE	V	工藤・兵藤2002
苦小牧市	静川22	—	4号住居跡	—	4.4	(4.4)	0.25	—	—	1	5	—	—	—	V	工藤・兵藤2002
苦小牧市	静川22	—	5号住居跡	IV	4.3	3.5	0.15	—	—	—	—	—	—	V	工藤・兵藤2002	
苦小牧市	静川22	—	6号住居跡	III	5.4	5.3	0.10	—	—	2	18	—	—	—	V	工藤・兵藤2002
苦小牧市	静川22	—	7号住居跡	IV	5.4	4.5	0.24	—	—	1	10	—	—	—	V	工藤・兵藤2002

○:有、×:無、—:不明、遺構名:報告書の記載に準じた

掘り込みの深さは、掘り込み面の認定次第で数値に変化が生じてしまう可能性があるため、注意が必要である。表に示した数値相互を、均質な意味をもつものとして取り扱うことはできない。あくまでも目安程度と考えて議論を進めていくこととしたい。ここで注目したいのは、石井（2005）が言及している掘り込みの浅い住居址である。続縄文のIV期（札幌市K 39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点あるいはH 37 遺跡）やV期（静川22）には、深さが約10～15cm程度の掘り込みの浅い住居址が

確実に存在している。それらには、深さが約30～40cmの住居址が同一遺跡あるいは同一時期からともに検出されている。それとともに、縄文晩期の竪穴住居址にも、掘り込みの浅い皿状の断面形を呈するものが認められる（千歳市キウス5遺跡、苦小牧市柏原5遺跡等）。晩期に帰属する掘り込みの浅い住居址に関しては、まだわずかな事例しか確認されていないため、続縄文のそれと同一の脈絡で評価できるのかどうか、今後の類例の増加を待って検討する必要があろう。

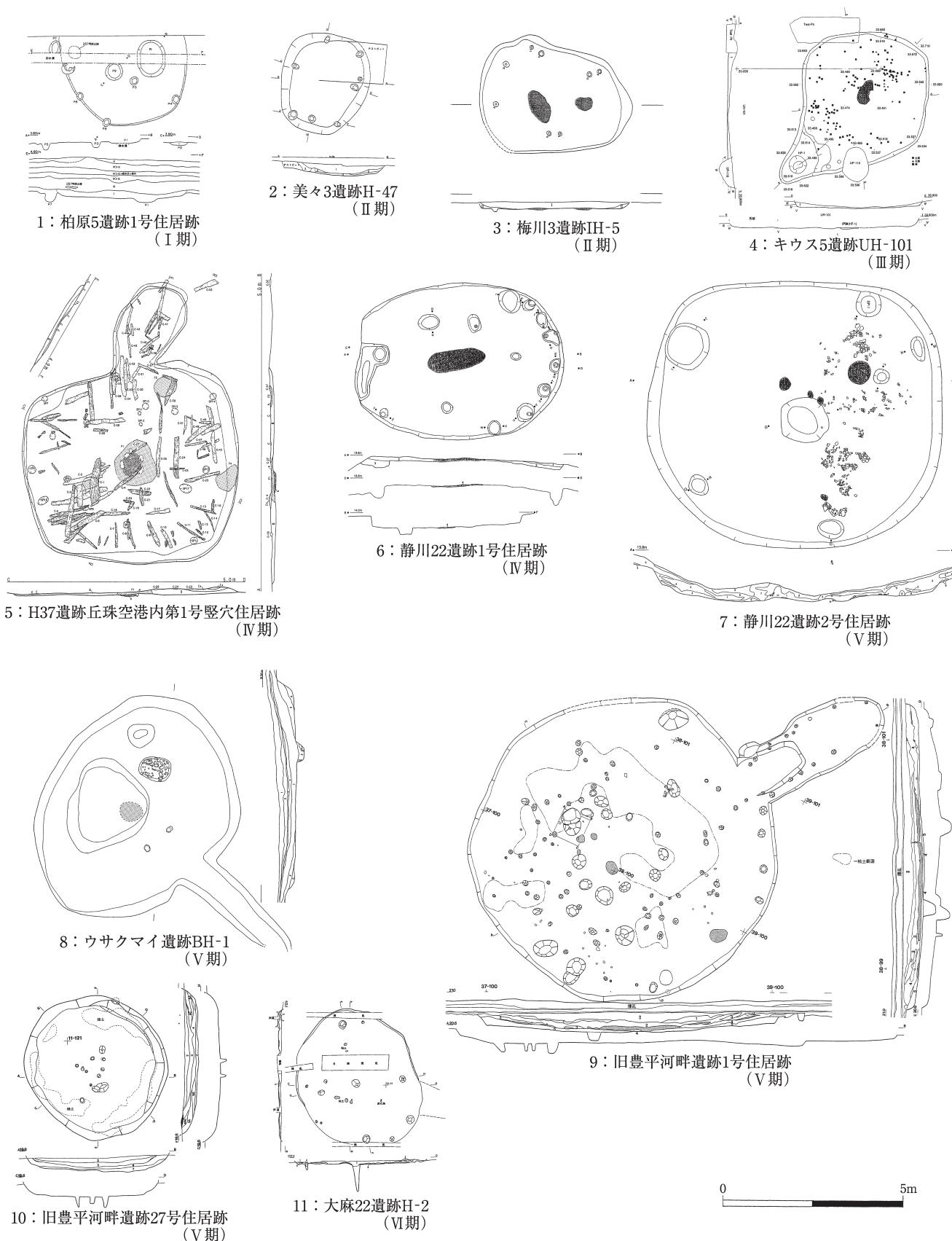


図2 縄文晩期～続縄文における竪穴住居址

炉址：縄文晩期に属する多くの住居址からは、中央部分に石囲いをもたない炉址が検出されている。晩期末の札幌市 T 151 遺跡では、炉址の周囲から石囲いの礫が抜き取られた痕跡が確認されており、晩期での石囲いをもつ炉址の数少ない例となっている。その一方で、当該期の竪穴住居址が多数発掘されている千歳市美々 2 遺跡では、住居址のほとんどから炉址が確認されていない。これが、斜面地に立地しているというこの遺跡の特性を反映したものであるのかどうかは、今後議論を要する問題といえよう。

続縄文初頭・前葉（IV～V期）になると、大半の住居址で炉址がみられるようになり、なおかつ石囲いのものの数が顕著に増えている。また、床面からは、複数の炉址が検出されている事例が多いことも注意される。それら複数の炉址は、住居内で相互に隔たった位置から検出されるのではなく、近接、ときには重複して検出されることの方が多い（K 39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点の HP 1、N 30 遺跡の HP 6 等）。そのため、これらは、住居内での同時利用を示しているというよりは、むしろ炉の更新・位置換えがおこなわれていたことを示唆しているといえよう。また、表には示さなかったが、住居址本体から張り出し部にかけての区域で、炭化物集中箇所や炉址が検出される事例がいくつかの遺跡で認められている（K 39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点の HP 1・7・10、N 30 遺跡の HP 4・6 等）。当該期の竪穴住居址において認められる特有の傾向の一つといえるかもしれない。張り出し部の性格を考えるうえで、重要な傾向となるであろう。

続縄文中葉（VI期）に帰属する事例では、これまでのところ炉址が検出されていないのが注目される。

小ピット：当該期の住居址内における小ピットの分布は、とくに明瞭な傾向を示すことがない方が多く、上屋構造の復元を難しくしている。一基の住居址から多数の小ピットが検出される例があるが、それらは上屋の更新・建て替えの結果を反映している可能性が高い。札幌市 N 30 遺跡の HP 6 では、炉址周辺から多数の小ピットが検出されており、炉の使用時に小杭を刺した痕跡ではないかと想定されている（羽賀編 2004：101）。

焼失住居址：集成の結果をみれば、縄文晩期では焼失住居址の検出例は少ない、との大島（1994：22）の指摘を追認することになったとともに、続縄文になって焼失住居址の可能性のある資料が明らかに増えていることがわかる。

覆土中の遺構：覆土中から検出された炉址等の遺構に関する限り、続縄文（とくに V 期）になって類例が増えてい

ることがわかる。竪穴住居址の“ライフ・ヒストリー”を明らかにするため、今後、埋没途上の窓みの段階で実施された活動内容の実態について、注意をはらっていく必要があろう。そうした点で注目すべきなのが、札幌市 N 156 遺跡（羽賀編 1999）のような事例である。同遺跡の第 1 号竪穴住居跡は、縄文後期に構築されたものと考えられているが、覆土中からは続縄文初頭（IV 期）に属する数個体の土器群がまとまって検出されている。覆土から検出された石器のなかにも、同時期に属する可能性のあるものが含まれている。このような事例が、窓みを利用した活動痕跡を示しているのか、あるいは住居址周囲の包含層中からの二次的な移動の結果を示しているのか、検討が必要なことは確かであろう。

項目ごとの傾向について検討してきた。以下にそのまとめをおこなう。

①縄文晩期のうち I・II 期に属する事例はまだわずかしか検出されていないため、晩期のなかでの変遷過程を具体的に論じることは難しい。III 期の事例を主にみてみると、円形・楕円形を主な平面形とし、張り出し部をもたず、小・中形のサイズを中心とした住居址が構築されていたといえる。

②続縄文初頭（IV 期）になって、張り出し部をもつものが本格的に現れ、なおかつ張り出し部をもつ住居址を中心として、サイズの大形化が認められるようになる。あわせて、床面からの複数の炉址や小ピット、焼失住居址、覆土中の遺構の検出例が、IV 期から増加する傾向が認められる。住居の構築→炉や上屋の更新→住居の放棄→上屋の焼失あるいは埋没過程の窓みでの何らかの活動の実施、というサイクルに一定の傾向がこの段階に確立したとみることが可能である。ただし、張り出し部をもたない、小・中形の住居址も依然として構築され続けている。この両者の間で、活動から放棄にいたる過程にどのような違いがあるのかを明らかにすることは、続縄文初頭・前葉での居住活動を考えていくうえできわめて重要な課題となるであろう。

③続縄文前葉（V 期）に属する資料で認められた主な傾向は、N 30 遺跡や H 37 遺跡での調査結果が示すように、そのほとんどが前段階の IV 期から確認できる。したがって、現時点では、石狩低地帯において縄文晩期と続縄文との間に、竪穴住居址に関する様々な形態上の差異が存在していた、ということになる。ただし、この評価は、晩期前・中葉の資料の増加を待って再検討する必要があろう。

④続縄文中葉（VI 期）になると、ふたたび住居址のサイズは小形化し、なおかつ炉址も認められなくなる。少な

くとも、前段階のⅤ期で認められた様々な傾向が、この段階になって確認されなくなることは注目されてよい。ただし、検出された資料数がまだ少ないため、この傾向がどこまで一般的なものであるのか確言はできない。いずれにしても、ここで取り上げた遺構を「住居址」として把握するのが妥当かどうか、今後、他の遺構（とくに屋外炉址）との関係も把握したうえで、議論をおこなっていく必要があろう。

IX-5 おわりに

本地点からは、続縄文初頭～前葉の竪穴住居址の形態とその変遷を理解するうえで、きわめて重要な資料が得られたと考えることができる。小稿では、本地点から出土した竪穴住居址の形態や埋没過程に関する調査結果の整理をおこない、また石狩低地帯での縄文晚期～続縄文の竪穴住居址の変遷過程について若干の検討を試みてきた。ここでは、あくまでも傾向の整理を第一の目的としてきたため、把握された傾向の意味づけにまでは充分な議論を及ぼしていない。とくに他地域との関係、形成過程や機能・用途にかかわる問題については、今後の課題としている。出土遺物の検討などをふまえ、あらためて議論をおこなうこととしたい。

引用文献

- 秋山洋司編 1998『H 37 遺跡栄町地点』札幌市教育委員会。
- 石井 淳 1998「後北式期における生業の転換」『考古学ジャーナル』439:15-20。
- 石井 淳 2005「札幌市内の遺跡分布からみた続縄文時代の土地利用方法」海交史研究会考古学論集刊行会編『海と考古学』六一書房:141-166。
- 石川 徹 1979『続千歳遺跡』千歳市教育委員会。
- 石橋孝夫編 1979『SHIBISHIUSU II』石狩町教育委員会。
- 石橋孝夫・清水雅男 1984『紅葉山33号遺跡』石狩町教育委員会。
- 乾 芳宏 1979「恵山式文化の住居址について」千歳市教育委員会編『ウサクマイ遺跡群とその周辺における考古学的調査』千歳文化財保護協会:160-167。
- 上野秀一編 1998『N 30 遺跡』札幌市教育委員会。
- 宇田川洋 1982「住居」『縄文文化の研究』6雄山閣:21-34。
- 大島直行 1994「縄文時代の火災住居—北海道を中心として—」『考古学雑誌』80-1:1-56。
- 大谷敏三・田村俊之編 1986『梅川3遺跡における考古学的調査』千歳市教育委員会。
- 大沼忠春編 1991『美沢川流域の遺跡群 XIV』財団法人北海道埋蔵文化財センター。
- 加藤邦雄他 1984『T 464 遺跡 T 465 遺跡 T 466 遺跡 T 468 遺跡』札幌市教育委員会。
- 工藤 肇・兵藤千秋 2002『苦小牧東部工業地帯の遺跡群IX—苦小牧市静川22遺跡発掘調査報告書—』苦小牧市教育委員会。
- 熊木俊朗 2003『道東北部の続縄文文化』野村 崇・宇田川洋編『新北海道の古代2 続縄文・オホーツク文化』北海道新聞社:50-69。
- 小杉 康・高倉 純・守屋豊人編 2004『K 39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点発掘調査報告書 I』北海道大学。
- 佐藤一夫・宮夫靖夫編 1998『柏原5遺跡』苦小牧市教育委員会。
- 園部真幸編 1984『旧豊平河畔・七丁目沢7』江別市教育委員会。
- 高橋正勝編 1981『元江別遺跡群』江別市教育委員会。
- 高橋正勝編 1985『旧豊平河畔』江別市教育委員会。
- 高橋正勝編 1986『旧豊平河畔V』江別市教育委員会。
- 高橋正勝・直井孝一・園部真幸 1983『大麻6・旧豊平河畔』江別市教育委員会。
- 武田 修編 1996『常呂川河口遺跡(1)』常呂町教育委員会。
- 武田 修編 2000『常呂川河口遺跡(2)』常呂町教育委員会。
- 種市幸生編 1983『ママチ遺跡』財団法人北海道埋蔵文化財センター。
- 千歳市教育委員会編 1979『ウサクマイ遺跡群とその周辺における考古学的調査』千歳文化財保護協会。
- 千葉英一・西田 茂編 1992『美沢川流域の遺跡群 XV 第1分冊』財団法人北海道埋蔵文化財センター。
- 長沼 孝編 1987『千歳市ママチ遺跡III』財団法人北海道埋蔵文化財センター。
- 野中一宏編 1994『大麻22遺跡』江別市教育委員会。
- 羽賀憲二編 1987『N 295 遺跡』札幌市教育委員会。
- 羽賀憲二編 1989『T 151 遺跡南側地点』札幌市教育委員会。
- 羽賀憲二編 1996『H 37 遺跡丘珠空港内』札幌市教育委員会。
- 羽賀憲二編 1999『N 156 遺跡』札幌市教育委員会。
- 羽賀憲二編 2004『N 30 遺跡第2次調査』札幌市教育委員会。
- 畠 宏明他 1986『美沢川流域の遺跡群IX』財団法人北海道埋蔵文化財センター。
- 藤本 強 1977「本遺跡発見の住居址に関する若干の予察」東京大学文学部考古学研究室・常呂研究室編『岐阜第三遺跡』東京大学文学部:127-133。
- 皆川洋一編 1997『千歳市キウス5遺跡(3)』財団法人北海道埋蔵文化財センター。